

【研究ノート】

保育・幼児教育・初等教育教員養成課程における
音楽基礎学習内容の検討

山下 真由美 高橋 セリカ

Examination of Basic Music Learning Contents in Childcare,
Early Childhood Education and Elementary School Teacher Training Courses

Mayumi YAMASHITA Serika TAKAHASHI

本稿は、保育・幼児教育・初等教育教員養成課程で学ぶ学生の音楽基礎学習内容の検討を目的に、保育所保育指針、幼稚園教育要領、小・中学校音楽学習指導要領に示される音楽表現及び音楽基礎内容を整理し、乳幼児・児童の音楽活動の構想や指導に必要なとされる音楽基礎学習内容を検討した。その結果、「①表記に関わること、②楽語・用語の理解に関わること、③音楽の構造に関わること、④形式等」の4分類約150項目が明らかとなった。同時に、理論と実践の往還による並行授業の学習法が検討課題として示された。

キーワード：音楽基礎学習内容、幼児教育、音楽教育、初等教育教員養成課程、
学習指導要領

1. はじめに

(1) 研究の背景

保育・幼児教育・初等教育において、指導者が音楽的表現活動を展開するには、まず教材である楽譜を読み解き、次に音楽を表現する力が必要とされる。平成30年改定幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領では、「音楽に親しみ、歌をうたったり、簡単なリズム楽器を使うなどする楽しさを味わう」と、音楽活動を展開する目的を示している。また、小学校音楽学習指導要領（2018）では、「曲想と音楽の構造などの関わりについて気付くとともに、音楽表現を楽しむために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付ける」とし、音楽の気付きと学びの進展が示されている。このことから指導者は、幼児や児童が音楽表現活動の楽しさに気付き、音楽の楽しさを味わうなどの音楽活動を構想・展開する力を身に付けることが重要とされる（保育所保育指針解説、幼稚園教育要領解説、小・中学校音楽学習指導要領解説2017）。

たとえば指導者が関わる音楽活動のひとつとし

て、保育園や幼稚園における子どもの歌の弾き歌いや、小学校の音楽授業における歌唱指導があげられる。その際、指導者が表現活動を展開する手順は、まず教材である楽譜が示す記号の意味を読み解き、楽譜に示される音、リズム、音楽の意味を理解し自らがピアノを奏で、歌をうたい、子ども達と共に豊かな音楽活動を展開していく。いわば、音や楽譜（教材）理解に基づく音楽活動の具現化である。自らが活動の媒体となり、ピアノや楽器を奏して弾き歌う音楽活動は、対象である子どもにも音楽の喜びや楽しさを伝えるとともに、豊かな情操や表現力を育むことを目的とする（マーセル1967）。つまり、教育のねらいの実現に向けた活動であり、指導者の音楽の理解が問われるのである。その根源を支えるのが音楽基礎知識と基礎技能である。

(2) 問題の所在と先行研究の概観

では、音楽基礎知識が不十分な場合、学習者の音楽技能の習得過程において、どのような問題が生じるであろうか。不完全な音楽基礎知識は、音

楽技能の根拠と成り得ないことから技能習得に戸惑いを感じ、さらには間違えて覚えた音や技能のエラー修正に多大な労力を要する。つまり、記されている音楽記号の不十分な理解による謝った練習（ピアノ技能習得）は、正しくない（悪い）クセが身に付き上達の妨げとなる。音楽技能・わざの獲得について宮城（1948）は、「上達において大切なことは悪いクセをつけないこと」とし、悪癖修正の労を示している。筆者は、これまでの音楽指導から、学生の音楽技能の習得過程の困難さの要因のひとつには、このような音楽基礎知識理解の未熟さが背景にあると考察する。とりわけ、音楽経験が浅い初学者の音楽技能熟達過程においては、基礎知識に支えられた段階的な技能習得が必須である。正しい基礎知識理解の下、知識と技能を統合させ、自己コントロールされた身体知を積み重ねる過程が、音楽技能の獲得である。したがって、技能を支える音楽基礎知識理解は重要であると同時に、音楽基礎知識を明確にすることは、音楽技能の十全な獲得に不可欠である。

音楽基礎知識関わる先行研究として、岩佐ら（2015）は、音楽基礎知識の理解度と練習日数・練習時間が演奏技術に関連していることを明らかにした。河原田（2015）は、楽譜を読み取る知識「音楽理論」の度合いが楽曲を仕上げる力に関係することを示した。平井（2016）は、教員養成課程におけるピアノ実技の指導法としてコードネームによる伴奏指導例を提言し、音楽知識の中のひとつであるコードネームの理解を促している。高橋・山下（2018）は、音楽基礎知識（楽典）とソルフェージュ（実践）の並行教授の相互作用による学習展開の有用性を示している。また、山下（2019）は、幼稚園教育実習の課題曲（約150曲）の楽曲分析を行い、教育実習課題曲の習得には小・中学校音楽学習指導要領の内容理解が重要であると明示している。

これらの先行研究は、音楽基礎知識と技能習得の関連性や基礎知識の重要性が述べられているものの、保育・幼児教育・初等教育教員養成課程における音楽基礎学習内容の全容は示されていない。

2. 方法

(1) 研究の目的

そこで本研究では、保育・幼児教育・初等教育教員養成課程における保・幼・小の指導内容の関

連性を踏まえ、指導者が乳幼児期及び児童期における子どもの豊かな音楽活動の構想・展開を行う上で必要とされる音楽基礎学習内容の検討を目的とする。

(2) 研究の方法

保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領、小学校音楽学習指導要領、中学校音楽学習指導要領の記載事項内容を基に、音楽及び音楽表現活動に関連する音楽基礎内容について抽出・整理する。それらを踏まえ、指導者が音楽表現活動を展開する上で音楽基礎知識として必要とされる音楽基礎学習内容の整理・検討・考察を行う。

(3) 音楽基礎知識とは

音楽（基礎）知識は、一般的には音楽理論や楽典と呼ばれ、音楽用語の理解や音楽の構造、音楽の様相などを表す音楽の専門的知識を示す。日本には我が国独自の音楽、いわゆる雅楽にはじまる日本音楽が存在するが、明治期の西洋近代化の歩みと音楽教育の進展において、西洋音楽をもとにする五線記譜法による音楽表記が導入され現在に至る（吉川1965, 中村1993）。そして今日示される音楽の殆どは、五線記譜法で記される音楽であり、音楽の構造を理解するための記号及び音楽用語等も西洋音楽を基盤とした音楽知識である（芥川1971）。したがって、本論における音楽基礎知識も、西洋音楽を中心に表された楽譜及び音楽構造に基づく楽曲が保育・幼児教育・初等教育活動に多く用いられている歴史的経緯を踏まえ（塚原1993）、五線記譜法をもとにした音楽の基礎的知識を「音楽基礎知識」と定義する。

3. 結果

(1) 保育所保育指針・幼保連携型認定こども教育・保育要領、幼稚園教育要領に示される音楽活動及び音楽基礎知識の関連・特徴

保育所保育指針・幼保連携型認定こども教育・保育要領、幼稚園教育要領に基づき、音楽活動及び音楽基礎知識がどのように示されているのか検討する。保育・幼児教育における五領域（「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」）及び「乳児保育」をもとに、「①内容」、「②解説内容・事例」について抽出・整理を行い、さらにそれらの内容を

踏まえて、「③音楽活動・音楽基礎知識との関連」の整理を行う(表1)。表1は、保育・幼児教育の音楽活動と音楽基礎知識の関連及び音楽基礎知識の特徴を示す。

(2) 小・中学校音楽学習指導要領に示される音楽活動および音楽基礎知識の関連・特徴次に、小・中学校音楽学習指導要領に基づき、音楽活動及び音楽基礎知識がどのように示されているのか検討する。

表1. 保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領に示される音楽活動及び音楽基礎知識の関連と特徴

領域等	①内容	②解説内容・事例	③音楽活動・音楽基礎知識との関連
表現 乳児保育	・生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり感じたりして楽しむ。	風の音や雨の音、身の回りや自然の中にある音に気付く。 語りかけるような調子の歌	音 サウンドスケープ 語りかけるような調子の歌
表現	・美しいものや心を動かす出来事に触れイメージを豊かにする。	創造性を養う	創造性
表現	・感動したことを伝え合う楽しさを味わう。	感動の共有、伝え合う喜び 受容と共感	感動の共有 受容と共感
表現	・感じたことや考えたことを音や動き等で自由に表現する	リズムに合わせて体を動かす 思いを音や声、身体の動きに表現する	リズムの多様性 身体表現
表現	・いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。	音を出す素材で音を出して楽しむ	素材 音
表現	・音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単な手遊び・リズム楽器を作ったりする楽しさを味わう。	歌を歌う、簡単な手遊び 簡単なリズム楽器を作り 音やリズム遊び、音楽を聴く 簡単な楽器を演奏する 将来音楽を楽しむ生活に繋ぐ	歌唱、リズム楽器、リズム と音色等の気付き
表現	・表現を受容し、幼児自身が表現しようとする意欲を受け止める。	教師の役割は幼児が表現する意欲を受け止め表現を受容する。	表現の受容
表現	・表現する環境を整え、他の幼児の表現に触れられるよう配慮。表現の過程を大切にす。	表現意欲を育て環境を整える。他者の表現に触れる配慮。子どもが表現を楽しむ表現の過程を大切にす。	他者表現の受容の育成、表現過程を楽しむ工夫
環境	・玩具などの音質は子どもの発達に応じて適切に選択。遊びを通して感覚の発達を促す。	音の出る玩具は子どもにとって心地よい音質や音量の配慮。	音質、音量
環境	・正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや伝統的な遊びに親しむ。	七夕や正月、節句など伝統的行事と関わる古くから親しまれる歌や唱歌、わらべうたの楽しさを味わう。	伝統的な行事の歌 国歌、唱歌 わらべうた
言葉	・言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにする。	リズムカルな節回しの手遊びや童謡を歌うことは体でリズムを感じながら色々な言葉を使い表現する楽しさにつながる。	手遊び歌 童謡 体でリズムを感じる

*太字は、音や音楽活動を示す

小学校音楽学習指導要領は、内容を「A表現」、
「B鑑賞」及び「共通事項」の3つで構成する。
「A表現」と「B鑑賞」は、音楽を経験する二つ
の領域であり、「A表現」は、歌唱、器楽、音楽
づくりの三つに分類される。「B鑑賞」は、単一
領域である。また「共通事項」は、表現及び鑑賞
の学習において共通に必要な内容を示す。

小学校音楽学習指導要領〔共通事項〕は、「音
楽を形づくっている要素」を二つに分けている
(表2)。「共通事項」は、「表現及び鑑賞の学習に
おいて共通に必要な資質・能力」養うことを
ねらう。このことは、平成29年告示小学校音楽学
習指導要領の改訂における変更点として「学習内
容、学習指導の改善・充実」における「〔共通事
項〕の指導内容の改善」として、音楽の働きと関
わりながら理解・活用するよう、その取扱いが示
されている。つまり、楽譜を解釈し音楽理解に必
要な基礎知識を学ぶことで資質・能力の育成に繋
がるとし、音符や記号及び用語等の音楽基礎学習
内容が明示されている。

表2. 小学校音楽学習指導要領〔共通事項〕

共 通 事 項	①音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働 きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りなが ら、聴きとったことと感じ取ったこととの関わりにつ いて考える〔思考力、判断力、表現力等〕
	②音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音 符、休符、記号や用語について、音楽における働きと 関わらせて理解する〔知識〕 ＜内容＞(37項目) 全音符、付点2分音符、2分音符、付点4分音符、 4分音符、付点8分音符、8分音符、16分音符、スキ ップの音符、4分休符、8分休符、ト音記号、ヘ音記 号、五線と加線、小節線、終止線、シャープ、フラッ ト、ナチュラル、フォルテ、メゾフォルテ、 メゾピアノ、プレス記号、拍子(4分の2、4分の3、 4分の4、8分の6)、クレッシェンド、ディクレッシ ェンド、反復記号、カッコ付きの反復記号、タイ、 スラー、アクセント、スタッカート、速度記号

次に、共通事項の内容「音楽を形作っている要
素」について整理を行う。「音楽を形づくっている
要素」は、「①音楽を特徴付けている要素」と
「②音楽の仕組み」の二つに分類され、さらに

「①音楽を特徴付けている要素」は11項目、「②音
楽の仕組み」は4項目の計15項目の音楽基礎学習
内容が示されていることが分かる(表3)。

表3. 音楽を形づくっている要素(小学校)

音楽を形 づくって いる要素 (計15 項目)	①音楽を 特徴付け ている要素 (11項目)	a.音色, b.リズム, c.速度, d.旋律, e.強弱, f.音の重なり, g.和音の響 き, h.音階, i.調, j.拍, k.フレーズなど
	②音楽の 仕組み (4項目)	l.反復, m.呼びかけとこ たえ, n.変化, o.音楽の 縦と横との関係など

一方、中学校音楽学習指導要領〔共通事項〕で
は、音符や記号及び用語等27項目を取り上げられ
ている(表4)。

表4. 中学校学習指導要領〔共通事項〕

拍、拍子、間、序破急、フレーズ、音楽、調、 和音、動機、アンダンテ、モデラート、アレ グレット、リタルダンド、アテンポ、アチェ ルランド、レガート、ピアノシモ、フォル テシモ、ディミヌエンド、ダ・カーポ、ダル・ セーニョ、フェルマータ、テヌート、3連符、 2分休符、全休符、16分休符
--

次に、表5「小・中学校音楽学習指導要領に示
される音楽基礎内容一覧」は、「小学校音楽学習
指導要領〔共通事項〕」(表2)及び、小学校音楽
学習指導要領の「音楽を形づくっている要素」
(表3)、さらに「中学校学習指導要領〔共通事項〕」
(表4)を統合・整理した一覧である。1)「要素・
仕組み」の15項目の各カテゴリー(表3)に対し
て、2)「要素・仕組みの説明」、3)「取り扱う内
容の配慮」、4)「音楽基礎内容(共通事項含)」と
の視点から統合・整理を行い、併せて「小学校学
習指導要領共通事項(37項目)」(表2)及び「中
学校学習指導要領共通事項(27項目)」(表4)の
計64項目を加え、小・中学校学習指導要領におけ
る音楽基礎内容一覧として示す(表5)。

表5. 小・中学校音楽学習指導要領に示される音楽基礎内容一覧

音楽を形づくっている要素	1) 要素・仕組み	2) 要素・仕組みの説明	3) 取り扱う内容の配慮	4) 音楽基礎内容 (共通事項含)
①音楽を特徴付けている要素	a. 音色	声や楽器などの様々な音の特徴	身の回りの音, 声や楽器の音色, 歌い方や楽器の演奏の仕方による様々な音色など	声や楽器の音や音色 楽器演奏による音色 身の回りの音 サウンドスケープ
	b. リズム	音楽の時間的まとまりや音楽の時間を刻んだりするもの, 小学校では主に「リズム・パターン」	音符や休符を組み合わせた様々なリズム・パターンや言葉や身の回りの音に含まれるリズム・パターン	リズム, 音価 (音の長さ) 音符, 休符 全音符, 付点2分音符, 付点4分音符, 4分音符, 8分音符, 16分音符 スキップのリズム 全体符, 2分休符, 4分休符, 8分休符, 16分休符, 3連符
	c. 速度	基準となる拍が繰り返される速さのこと, 「J=96」は, 基準となる拍の四分音符を1分間に96回打つ速さ	曲全体の速さ→速い曲, 遅い曲など 速度の変化→「速くなる」「遅くなる」など	拍子 J=96の意味 速度記号 速度に関わる楽語 速度変化に関わる楽語 アンダンテ, モデラート, アレグレット, リタルダンド, アテンポ
	d. 旋律	音の連続的な高低の変化がリズムと組み合わせられ, あるまとまった表現を生み出しているもの	上行, 下行, 山型, 谷型, 一つの音に留まるなどの音の動き方, 順次進行, 跳躍進行などの音の連なり方	フレーズ 順次進行 跳躍進行 フレーズとリズム
	e. 強弱	音量のように数値で表されるもの, 曲の各部分で相対的に感じられるもの, 音の質感により強弱が表されることもある	音の強弱→「強く, 少し弱く, 少し強く, 弱く」 強弱の変化→「だんだん強く, だんだん弱く」「特定の音を強調して」など	音の強弱に関わる楽語, 強弱の変化に関わる楽語 フォルテ, メゾフォルテ, ピアノ, メゾピアノ 特定の音の強調を示す楽語, アクセント, テヌート, クレッシェンド, ディミヌエンド, アチェルランド
	f. 音の重なり	複数の音が同時に鳴り響いていること	複数の旋律やリズムに含まれる音など 複数の高さの音が同時に becoming 生まれる響き	重音 多様な響き
	g. 和音の響き	長調や短調など調性のある音楽において音が重なることよって生まれる響き	長調や短調の I, IV, V 及び V 7 を中心とした和音など	和音 長調と短調の I, IV, V 7 長調や短調における主要三和音
	h. 音階	音楽で用いられる基	長調の音階 (長音階), 短	音階 , 長調, 短調, 長音階, 短音階

		本的な音を高さの順に並べたもの、音階は時代や地域、民族により多様、音楽を特徴付ける	調の音階(短音階)、我が国の音楽に用いられる音階など扱う	日本の音階、民謡、ヨナ抜き音階、わたべうた
	i. 調	調性、音階で特定の音を中心に位置付け音楽の特徴を生み出す長調と短調	長調と短調の違いやハ長調とイ短調の視唱や視奏などを扱う、音楽づくりなどでは調性にとらわれない音楽を示す	調・調性 長調と短調 調性にとらわれない楽曲
	j 拍	音楽に合わせて手拍子・歩いたりすることができる一定の間隔をもって刻まれるもの、間隔に伸び縮みもある	「拍のある音楽」:一定のアクセントのパターンを伴って繰り返される 「拍のない音楽」:伝承遊びの歌、民謡や諸外国の音楽、現代音楽など	拍、拍子 拍のある音楽、拍のない音楽 民謡、諸外国の音楽 現代音楽 4分の2拍子、4分の3拍子 4分の4拍子、8分の6拍子
	k. フレーズ	音楽の流れの中で、自然に区切られるまとまりを示す	歌詞の切れ目やプレスで区切られるまとまり、数個の音やリズムの小さなまとまり、幾つか繋がった大きなまとまりなど	プレス フレーズ 音楽のまとまり
② 音楽の仕組み	l. 反復	リズムや旋律などが繰り返される仕組み	リズムや旋律が連続して繰り返される反復、A-B-A-C-Aの「A」に見られる合い間をおいて繰り返される反復、A-B-Aの三部形式の「A」に見られる再現による反復	反復 形式 三部形式
	m. 呼びかけとこたえ	ある音やフレーズ・旋律に対して、もう一方の音やフレーズ・旋律がこたえるという呼応する関係にあるもの	呼びかけに対して模倣でこたえるもの、性格の異なった音やフレーズや旋律でこたえるもの、短く合いの手を入れるもの、一人が呼びかけてそれに大勢がこたえるなど	フレーズの模倣 呼びかけとこたえのフレーズ 動機
	n. 変化	音楽を形づくっている要素の表れ方や関わり合いが変わることにより起こるもの	リズムや旋律等が反復した後に異なるものが続く変化、変奏のようにリズムや旋律などが少しずつ変わる変化	
	o. 音楽の縦と横との関係など	音の重なり方を縦、音楽における時間的な流れを横と考え、その縦と横との織りなす関係を示す	輪唱(カノン)のように同じ旋律がずれて重なる、二つの異なる旋律が同時に重なる、はじめは一つの旋律だったものが	輪唱(カノン) ユニゾン 形式 様式 動機

			途中から二つの旋律に分かれて重なるなど	
③ 表記・奏法 他	p.表記, 奏法 他			ト音記号, ヘ音記号 五線と加線, 小節線, 終止線 スタッカート, アクセント, テヌート, スラー, タイ, 反復記号(カッコ付き), ダ・カーポ, ダルセーニョ, フェルマータ, 間, 序破急

*太字は〔共通事項〕の「用語や記号」の内容を示す

(3) 小学校音楽学習指導要領歌唱共通教材と音楽基礎知識

次に、保育園・幼稚園・小学校の学びの連続の視点から、小学校音楽学習指導要領歌唱共通教材における音楽実技技能と音楽基礎知識の関連について検討を行う。

小学校音楽学習指導要領では、歌唱教材（共通教材）として童謡・唱歌、わらべうた、日本古歌など24曲が示される。示される楽曲群は、明治期以降に保育唱歌として古くから親しまれ（塚原2009）、幼児期にも歌われることが多い楽曲である。そのことから、歌唱共通教材の半数以上は、保育所・幼稚園などにおいて季節や行事の歌として歌われ、わらべ歌などは遊びや生活の中で親しまれている。幼稚園教育要領では、「古くから親しまれてきた唱歌や、わらべうたなどに楽しみ、我が国の伝統的な遊びに親しむ」と示される。一方、小学校学習指導要領では、「我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた、日常生活に関連して情景を思い浮かべる音楽に親しむこと」と示される。

以上のことから、保育・幼児教育・小学校（初等教育）における子どもの歌の指導の関連性を踏まえた音楽基礎技能の共通性が理解できる。また、調性はハ長調が多いことから、シャープやフラットの黒鍵を音階構成に含まないため、歌の伴奏や弾き歌いにおいて取組みやすい楽曲であることが理解できる（表6）。

表6. 幼児期においても歌唱される小学校歌唱共通教材

	歌唱教材 楽曲名	調性	作詞・作曲者
第1学年	「うみ」 (文部省唱歌)	ハ長調	林柳波作詞 井上武士作曲
	「かたつむり」	ハ長調	(文部省唱歌)
	「ひらいたひらいた」		(わらべうた)
第2学年	「春がきた」 (文部省唱歌)	ハ長調	高野辰之作詞 岡野貞一作曲
	「虫の声」	ハ長調	(文部省唱歌)
	「タやけこやけ」	ハ長調	中村雨紅作詞 草川信作曲
第3学年	「うさぎ」	ハ長調	(日本古謡)
	「春の小川」 (文部省唱歌)	ハ長調	高野辰之作詞 岡野貞一作曲
	「ふじ山」 (文部省唱歌)	ハ長調	巖谷小波作詞
第4学年	「さくらさくら」		(日本古謡)
	「もみじ」 (文部省唱歌)	ハ長調	高野辰之作詞 岡野貞一作曲
第5学年	「こいのぼり」	ハ長調	(文部省唱歌)
第6学年	「ふるさと」 (文部省唱歌)	ハ長調	高野辰之作詞 岡野貞一作曲

(3) 保育・幼児教育・初等教育教員養成課程における音楽基礎学習内容

以上、保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説、幼稚園教育要領、小・中学校音楽学習指導要領における音楽活動及び音楽

基礎知識の抽出・整理(表1-表5)を基に、音楽基礎学習内容は、「①表記に関わること」、「②楽語用語の理解に関わること」「③音楽の構造に関わること」、「④形式他」に分類でき、項目は150ほどであり、学習法の検討を示す(表7)。

表7. 保育・幼児教育・初等教育教員養成課程における音楽基礎学習内容

	項目	内容	学習法
① 表記に関わること	音名	幹音(幹音名), 日本音名, 英音名, 伊音名, 独音名 変化記号(♯, ♭, ダブル♯, ダブル♭, ナチュラル), 派生音(派生音名) 変化記号の効力(調号の場合, 臨時記号の場合)	<ul style="list-style-type: none"> ・主に机上で学習可能 ・楽譜と対比して学習 ・ワークシートによる学習と写譜(手書き楽譜) ↓ ・リズムはリズム打ち(リトミック)の実践
	譜表	五線, 加線, 小節線, 終止線, 複縦線, オクターブ記号, 音部記号(ト音記号, ヘ音記号, ハ音記号等その他の記号), 大譜表	
	音符・休符	符頭(たま), 符尾(ぼう), 符こう(はた) 全音符, 付点音符, 2分音符, 付点2分音符, 4分音符, 付点4分音符, 8分音符, 付点8分音符, 16分音符, 付点16分音符, 全休符, 2分休符, 4分休符, 8分休符, 16分休符, 連符	
	拍子・リズム	拍子記号, 拍子(単純拍子, 複合拍子), 弱起と強起, スラー, タイ, シンコペーション, アウフタクト	
② 楽語用語の理解に関わること	標語・記号	速度記号(メトロノーム記号, 速度標語, 速度変化記号, リタルダンド, アテンポ), 発想記号, プレス記号 強弱記号(ピアノ, ピアニッシモ, フォルテ, フォルテシモ, メゾピアノ, メゾフォルテ, プレスト, ヴィヴァーチェ, アレグロ, アレグレット, モデラート, アンダンテ, アダージョ, レント, ラルゴ等) 奏法記号(レガート, スタッカート, フェルマータ等, テヌート), 反復記号(リピート記号, 1カッコ, 2カッコ付き反復記号) ダ・カーポ, フィーネ, ダル・セーニョ, セーニョ, コーダ) 付加語, 接尾語(ポコ, モルト, ピュウ, メーノ, センプレ等),	
③ 音楽の構造に関わること	音程	音程, 度数, 長音程, 短音程, 完全音程, 半音, 全音	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎知識(理論)とソルフェージュ(実践)による ・往還的並行授業による学習 ・実際に音を出して確認し知覚感受を深める
	音階	長音階, 短音階(自然的短音階, 和声的短音階, 旋律的短音階) 音階の構成音(主音, 下属音, 属音, 導音等) 音階構成上の三和音(I, II, III, IV, V, VI, VII)	
	調	長調, 短調, 調号と主音, 調のシステム(♯系と♭系の長調と短調)	
	和音	和音, 三和音, 主要三和音(主和音I, 下属和音IV, 属和音V) 七の和音, 属七の和音	
	転回形	基本形, 第1転回形, 第2転回形, 第3転回形(属七の和音)	
	コード	コードの意味, コードネーム, 主要三和音との対比,	
	移調・転調	移調・転調の意味	
④ 形式等	音	楽音の三要素(高さ, 強さ, 音色) 音楽の三要素(リズム, メロディー, ハーモニー)	
	形式等	2部形式, 3部形式, ユニゾン, カノン, 間, 序破急, 問いとこたえ, 動機	

4. 考察・まとめ

幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領，小・中学校音楽学習指導要領を基に，音楽活動及び音楽基礎内容に関わる項目の抽出・整理を行った。その結果，保育・幼児教育・初等教育教員養成課程における音楽基礎学習内容について，次の知見を得た。

1) 音楽基礎学習内容は，「①表記に関わること」，「②楽語・用語の理解に関わること」「③音楽の構造に関わること」，「④形式等」に分類され，学習項目として，およそ150が項目示された。

2) 「①表記に関すること」(表7)の「音名，譜表，音符・休符，拍子・リズム」は，主に楽譜理解に関わることであり，読譜力の基礎となるものである。

3) 「②楽語・用語の理解に関すること」(表7)は，小・中学校音楽学習指導要領〔共通事項〕(表2，表4)の「標語・記号」などの音楽用語の理解に関する内容である。

4) 「①表記に関すること」，「②楽語・用語の理解に関すること」は，楽譜と対比して学習することにより，一層理解が深まると考察する。たとえば，既知の子どもの歌の楽譜と対比することで，記号(音符)，楽語・用語の意味や音楽表現の理解が深まる。

5) 「③音楽の構造に関すること」(表7)の「音程，音階，調，和音，転回形，コード，転調・移調」は，楽譜理解に関わる内容であると同時に，音や音楽そのものと深く関わる。そのため，実際に音や音楽を自らの耳で確認する「知覚感受」が必要である(ダランベール2012)。つまり，「知識」(理論)とソルフェージュ(音楽基礎実技)の往還を通して知識と技能を結び付けていく，その過程が学習である。したがって，理論と実践の並行学習が有用であると考察する。

6) 「④形式等」(表7)は，「楽音の三要素，音楽の三要素」や「二部形式・三部形式」等の音楽の構造の理解は，理論と実践の往還による知覚感受によって音楽の理解が深まる。

7) 幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領では，子どもが遊びの中で「音や歌，リズムに親しむこと」や，「唱歌やわらべうたの歌唱，リズムや音あそび」などの具体的活動の例示がある。しかし，指導者がそれらの活動を展開するために必要な音楽基礎

知識については示されていない。一方，小・中学校学習指導要領では，児童・生徒が音楽基礎事項を学習することから基礎的学習内容が示されている。

8) 小学校音楽学習指導要領共通教材の歌唱曲(24曲)は，唱歌や童謡が多く含まれ，半数以上の楽曲は幼児期から歌われることから耳にする機会が多い(表6)。したがって，童謡などの子どもの歌の「弾き歌い」の音楽的技能の習得については，保育・幼児教育・初等教育教員養成課程においてほぼ同様であると理解できる。

5. 課題

保育・幼児教育・初等教育教員養成課程において指導者は，音楽基礎学習内容の理解を踏まえ，自らが音楽を体現する知識・技能を身に付けることが必要である(マーセル1965)。そのため音楽基礎学習の習得は，単に小・中・高等学校教育におけるリメディアルな学びとは異なる。子どもの「音楽による人間的成長」(マーセル1971)めざす活動は，確かな知識と実践(わざ)の両輪により実現する。したがって，音楽基礎知識と音楽実技を相互に関連付けた往還的な学び，いわば保育・幼児教育・初等教育の活動に転換活用できる音楽基礎知識の学習法が課題である。

今後は，明らかとなった音楽基礎学習内容を踏まえ，音楽基礎知識(理論)とソルフェージュ(実践・基礎実技)の往還による学習法の検討を行いたい。

付記

- 本研究の関連研究成果として次を公表している。
- (1) 高橋セリカ・山下真由美(2018)保育士・幼稚園教諭養成課程における音楽基礎カリキュラムの検討。日本教育メディア学会研究論集45
 - (2) 同内容について，日本教育メディア学会研第1回研究会。2018年7月(函館みらい館)口頭発表

参考文献

- 芥川也寸志(1971)音楽の基礎。岩波新書。
 平井李枝(2016)教員養成課程学生に対するピアノ「弾き歌い」指導法の研究。宇都宮大学教育学部教育実践紀要第2号
 石桁真礼生(1998)楽典—理論と実践。音楽之友

- 社.
- 岩佐明子・富田英子・烏丸左知子 (2015) 保育者養成における音楽教育についての調査研究—音楽基礎知識及び鍵盤楽器の練習量と演奏技術の観点から—. 京都文教短期大学研究紀要53
- J・L・マーセル・M・グレーン／供田武嘉津訳 (1965) 音楽教育心理学. 音楽之友社
- ジェームス・L・マーセル／美田節子訳 (1967) 音楽教育と人間形成. 音楽之友社
- ジェームス・L・マーセル／美田節子訳 (1971) 音楽的成長のための教育. 音楽之友社
- ジャン・ロン・ダランベール／片山千佳子・安川智子・関本菜穂子 (2012) 音楽理論と実践の基礎. 春秋社
- 河原田潤 (2015) 保育士・幼稚園教諭養成系における「音楽理論」の必要性と授業展開についての一考察. 常葉大学短期大学紀要46号
- 吉川英史 (1965) 日本音楽の歴史. 創元者
- 木下牧子 (2014) 一番よくわかる楽典入門. ナツメ社
- 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針. フレーベル館
- 宮城道雄 (1957) 宮城道雄全集. 三笠書房
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領. 東洋館出版社
- 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領. 教育芸術者
- 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領. フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領フレーベル館
- 中村理平 (1993) 洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—. 刀水書房
- 大島富士子 (2009) 正しい楽譜の読み方—バッハからシューベルトまで—〜ウイーン音楽大学インゴマー・ライナー教授の講義ノート. 現代ギター社
- 供田武嘉津 (1997) 最新学生の音楽通論. 音楽之友社.
- 高橋セリカ・山下真由美 (2018) 保育士・幼稚園教諭養成課程における音楽基礎カリキュラムの検討. 日本教育メディア学会研究論集45
- 塚原康子 (1993) 十九世紀の日本における西洋音楽の受容. 多賀出版株式会社.
- 塚原康子 (2009) 明治国家と雅楽. 有志社.
- 山懸茂太郎 (1958) 新訂音楽通論. 音楽之友社
- 山下真由美 (2019) 幼稚園教育実習課題曲の楽曲・奏法の分析. 北海道教育大学学校教育学会誌 23